

脚本

「1円ロマンス」

作
ササキタツオ

《あらすじ》

おつちよこちよいの女子高生、奥寺麻衣

(16)はある朝、駅前のコンビニで財布から多量の小銭を落としてしまう。恥ずかしさの中、小銭を拾う麻衣はそこで1円玉を拾った山本悟郎(16)に一目惚れして……。

1円玉をめぐる青春ロマンス！

《登場人物》

奥寺麻衣(16) 高校2年生。

山本悟郎(16) 高校2年生。

清水藍香(16) 高校2年生。

加藤壮一(16) 高校2年生。

お客① サラリーマン

子供たち

生徒たち

○ 駅前のコンビニ・外観（朝）

麻衣の声「（悲鳴）あーっ！」

○ 同・店内（朝）

レジ前、奥寺麻衣（16）の財布から
小銭が床に落ちてその辺に散乱する。
慌てて小銭を拾い集める麻衣。

視線の先の1円玉を手にとろうとする
と、山本悟郎（16）の頭と頭でぶつ
かる。

麻衣が顔を上げると悟郎と目が合う。

悟郎が麻衣の手に1円玉を渡す。

悟郎「落とし物です」

悟郎は長身メガネの黒髪男子である。

麻衣「あっ、どうも」

悟郎「1円でも、大切だから」

麻衣「は、はい」

お客①「あの、お嬢ちゃん、早く会計」

麻衣「すみませんっ！」

麻衣、そそくさとレジでお金を払って、

野菜ジュースを受け取ると、去る。
その様子を見ていた悟郎、足元にまだ
1円玉が落ちているのを見つける。

○駅・ホーム（朝）

時刻は7時半である。
列に並んで一息つく麻衣は野菜ジュースにストローをさして飲む。
ホームにやってくる悟郎と目が合う麻衣、恥ずかしくて、知らないふりをしてジュースを飲み干す。

麻衣のところにやってくる悟郎。

悟郎「あのっ！」

麻衣「な、なんですか？」

悟郎「いや、これ、まだ落ちてたの、拾ったから……」

と1円玉を麻衣に見せ、差し出す。

麻衣「あつ、ありがとう……」

○走っている電車・車内（朝）

混雑した電車内。

吊革につかまっている麻衣はちらりと悟郎の様子を伺う。

少し離れたところで英単語帳を読んでいる悟郎、麻衣の視線に気づく。

慌てて視線を逸らす麻衣。

麻衣「(ドキドキして)……」

○高校・外観(朝)

○同・教室・内(朝)

窓際の席で麻衣がため息をつく。

となりに座る清水藍香(16)。

藍香「えっ、マジ？ 惚れちゃったの!？」

麻衣「藍香、声、大きいよ」

藍香「だってービックリするじゃん!」

ポケットから1円玉を取り出す麻衣。

麻衣と藍香の様子を遠くで気にしている様子の加藤壮一(16)。

藍香「麻衣。それはもう告白。告白だよ!」

麻衣「えーっ」

藍香「だって、2度も麻衣のお金拾ってくれたんでしょ？　これはもう偶然を通り超えた運命！　運命だよ！」

麻衣「運命ねえ」

藍香「私も通学で運命の出会いとかしてみたいなー」

机の上に置いた1円玉を見つめる麻衣。

○駅・ホーム（朝・日替わり）

時刻は7時半である。

身だしなみを整える麻衣は野菜ジュース片手に悟郎を探す。

ホームの端で悟郎を見つける麻衣。

麻衣「お、おはよう」

不思議そうな顔をして麻衣を見る悟郎。

麻衣「昨日の！　1円を拾ってもらった」

悟郎「（思い出して）ああ、どうも」

麻衣「昨日はありがとうございました」

悟郎「いえ別に」

麻衣「私、奥寺麻衣って言います。高2です」

悟郎「山本です。僕も高2です」

麻衣「同い年だったんだね」

悟郎「そうですね」

野菜ジュースを飲む麻衣。

悟郎「好きなんですか？」

麻衣「えっ？」

悟郎「野菜ジュース、昨日も飲んでたから」

麻衣「大好きです！」

悟郎「えっ？」

麻衣「野菜ジュース！ 大好きなんです」

取り繕い、赤面する麻衣。

悟郎「僕も好きです。野菜ジュース」

微笑む悟郎。

○走っている電車・車内（朝）

並んで電車で揺られる麻衣と悟郎。

○池袋駅・JR改札前（朝）

やってくる麻衣と悟郎。

麻衣「私、山手線、内回りです」

悟郎「僕は外回りなんで。じゃあ、ここで」

麻衣「山本君。それじゃあ」

悟郎「あつ、名前！」

悟郎「えっ？」

悟郎「もう一回教えてください！」

麻衣「奥寺です。奥寺麻衣です」

悟郎「そうでした。今度はしっかり覚えたので大丈夫です。それじゃあ、また。奥寺さん！」

麻衣「うん。また！」

去っていく悟郎に小さく手を振る麻衣。

○高校・外観

○同・中庭

サンドイッチを食べている麻衣と藍香。

藍香「せっかく会えたのに何も言わなかったの？」

麻衣「そんなことないよ。名前とか聞いたし」

藍香「苗字だけでしょ？」

麻衣「それだけでも大収穫でしょ？ 会えただけでよかった的な」

藍香「ダメだよ、そんなんじゃ！ 運命の恋の女神は微笑んでくれないよ？ 頑張んなきゃ！」

麻衣「えーっ、ダメかな？」

藍香「そうだ。文化祭、来てもらったら？」

麻衣「えっ……。でも、そういうの好きそうなタイプじゃないっていうか」

藍香「じゃあ、どういうタイプなのよ？」

麻衣「うーん。しいて言えば、真面目系？」

藍香「真面目でもチャラくても。距離を近づけるチャンスじゃん！」

麻衣「そうかな？でも断られるの怖いよ」

藍香「何事もチャレンジ！言ってみないと」

麻衣「まあね……」

○駅・外観（朝・日替わり）

走ってくる麻衣。

○駅・ホーム（朝）

英単語帳を読んでいる悟郎。

時刻は七時半である。

悟郎のところに走ってやってくる麻衣。

麻衣「（息を切らして脇腹を押さえながら）間に合った！」

悟郎「奥寺さん。大丈夫？」

麻衣「大丈夫（息を整えながら）山本君。おはよう」

悟郎「おはよう（微笑んで）今日は野菜ジュース持っていないだね」

麻衣「あつ、買うの忘れた！ あれ飲まない
と、一日が始まった感じしないんだよね」
悟郎「ちよつと待ってて」

○走っている電車・車内（朝）

並んで電車に揺られる悟郎と麻衣はそれぞれ野菜ジュースを飲んでいる。

悟郎の横顔を見る麻衣。

麻衣「山本君。ジュース、ありがとう」

悟郎「一日、始まりました？」

麻衣「お陰様で」

○池袋駅・JR改札前

やってくる悟郎と一歩遅れて麻衣。

悟郎「奥寺さん。また」

麻衣「山本君！ 待って！」

悟郎「？」

麻衣「文化祭があるんです！ 今度の週末、うちの学校で。それで、もしよかったら、来てもらえませんか！？」

悟郎「文化祭、ですか？」

麻衣「ダメ、ですか……？」

悟郎「他校の文化祭なんて行ったことないから……。何やるんですか？」

麻衣「それが……メイドカフェなんですけど。って言ってもあの世の『冥途』にひっかけてお化けの格好するメイドカフェなんで

すけど……」

悟郎「奥寺さんも何か仮装するんですか？」

麻衣「私は、雪女になる予定です。どう、ですか……？」

悟郎「それは面白そうですね」

麻衣「それじゃあ」

悟郎「いいですね、行きますよ」

笑顔の悟郎に麻衣も笑顔になる。

○高校・外観

文化祭の看板が立っている。

タイトル文字・「文化祭当日」

○同・教室・外

オドロオドロしい「冥途」カフェ外観。

○同・教室・内

「冥途」カフェの受付に座る藍香。

雪女の仮装をした麻衣がやってくる。

藍香「彼、来ないね。ちゃんと伝えたんだよ

ね？」

麻衣「うん。でもこの格好見られるの、やっぱり恥ずかしいかも」

藍香「強がっちゃってー」

壮一がやってくる。

壮一「お前ら、次のお客さん。待たせるなよ」

麻衣「はい」

お客を席へ案内する麻衣。

壮一を見る藍香。

壮一「なんだよ」

藍香「別にー」

そこへやってくる悟郎。

悟郎「どうも」

藍香「いらっしやいませー」

悟郎「あの、奥寺さんってこのクラスですか？」

藍香「あっ！　じゃあ、あなたが山本くん？」

悟郎「えっ？　そうですけど……」

戻ってくる麻衣。

麻衣「山本くん！　本当に来てくれたんだね」

悟郎「約束したから」

壮一「何？ 奥寺の彼氏かなんか？」

悟郎「ち、違いますよ」

麻衣「そうそう。違うよ。もう加藤君ったら」

壮一「へえー」

苦笑する悟郎。

麻衣「私、案内するね。どうぞこちらへ」

麻衣に案内され、その場を去る悟郎。

壮一「……」

麻衣に案内され、席に着く悟郎。

麻衣が悟郎にメニューを渡す。

麻衣「おすすめは、あの世コーヒーのホット

かな」

悟郎「じゃあ、それにしようかな」

麻衣「あとで学校案内するね」

悟郎「忙しいなら別にいいよ」

麻衣「大丈夫。何とかなると思う」

笑顔で去ろうとする麻衣、衣装に足を

取られて転ぶ。

悟郎「だ、大丈夫？」

麻衣「大丈夫、大丈夫！」

と起き上がり、笑顔で去る麻衣。

入れ替わりに壮一がやってきて悟郎の机にお水を置く。

壮一「本気じゃないなら、関わるな」

壮一を見る悟郎。

悟郎「……」

去っていく壮一。

○同・廊下

文化祭でにぎわう生徒たち。

その中を悟郎と雪女姿の麻衣が歩いていく。

悟郎「なんか迷惑だったかな」

麻衣「そんなことないよ！ 嬉しかった」

転びそうになる麻衣。

麻衣に手を貸す悟郎。

麻衣「あ、ありがと。こんな格好でごめんね」

悟郎「いや。結構、似合ってると思う。雪女」

麻衣「そうかな？ せつかく来てくれたのに何もおもてなしできなくてごめんね」

悟郎「コーヒー、おいしかったよ。ここで大丈夫」

麻衣「ホント？」

悟郎「うん。じゃあ、また」

麻衣「またね」

去る悟郎の背中を見送る麻衣。

麻衣「……」

○同・教室・内

戻ってくる麻衣。

受付に藍香。

藍香「どうだった？ 彼、もう行っちゃったの？」

麻衣「楽しんでくれたみたいだったよ」

藍香「それじゃあポイントアップだね！ それにしても真面目系で、理系で、進学校。やっぱ違うねー。うちの男子にはいないタイプだね。あれ、麻衣には贅沢すぎかも」

麻衣「もう何？ 呪っちゃうぞー」

藍香「ごめんごめん」

○ 駅・外観（朝・日替わり）

○ 駅・ホーム（朝）

時刻は7時半。

人ごみの中、ホームに並ぶ人の中に悟郎の姿を探す麻衣。

だが悟郎の姿はない。

麻衣「……」

○ 青い空に流れる薄い雲

麻衣のMO「それから、1週間経っても、彼とは顔を合わせることはなかった……」

○ 高校・外観

○ 同・教室・内

窓側の席で麻衣と藍香が話している。

藍香「それ、絶対、避けられてるね」

麻衣「私なんかまずいことしたのかな？」

藍香「心当たらないの？」

麻衣「あつたらこんなに悩んでないよー」

藍香「だよねー」

そこへ壮一がやってくる。

壮一「それは本気じゃないってことじゃね」

麻衣「えっ」

藍香「なんでそんなことアンタに言われなきやならないの！」

壮一「お前らが騒がしく話してるからだろ」

去っていく壮一。

藍香「全く。これだからうちの男子は空気読めないっていうか」

麻衣「でも、言ってること、正しいのかも」

藍香「麻衣がそんなでどうするの!？」

麻衣「うん……」

○麻衣の家・外観（夜）

簡素な一軒家。

○同・麻衣の部屋（夜）

机の上出したノートPCに向かって
いる麻衣。

スマホを取り出して「私。山本くんの
文化祭に行ってみる」の文字を藍香に
送る。

引き出しから、1円玉を取り出す麻衣、
それを机の上に器用に立てる。

○悟郎の高校・外観

○同・校門・前

「文化祭」と書かれたアーチの前、に
ぎわう学生たちの中、麻衣と藍香がや
ってくる。

藍香「来たね」

麻衣「うん」

壮一の声「お前らも来たのか」

振り返る麻衣と藍香。そこに壮一。

麻衣「加藤君」

藍香「アンタ何やってるの？」

壮一「友達に呼ばれたんだよ。一緒に回ろうぜ！」

藍香「私たちには目的があるの！」

壮一「目的？」

○同・廊下

パンフレットを見ながら、歩いている麻衣と藍香。その後を壮一。

藍香「学年と名前しかわからないんだよね？ どう探そうか？」

麻衣「聞いて回るしかないよね」

壮一「そんなんじゃないんじゃね？」

麻衣「……」

藍香「ちよっと加藤！邪魔するなら消えて」

壮一「失礼しましたー」

麻衣「私、行ってくる」

麻衣は2年A組のクラスの前に立っている男子生徒たちのところへ行く。

麻衣「あの！山本くん、ご存知ですか？」

○同・階段

階段に座り込んでいるお疲れモードの

麻衣と藍香と壮一。

壮一「まだ諦めねーの？」

藍香「なかなか見つからないもんだね」

壮一「もう諦めろ、ってことじゃね？」

麻衣「……」

藍香「ちよつと！ 加藤！ 探す気ないなら、
ついてこないでよね」

壮一「お前らが不毛なんだろ」

麻衣「私、もう一回、聞いて回ってくる！ 二

人は休んでてよ」

藍香「麻衣……」

と足元に落ちていたチラシを見る藍香。

藍香「あつ……！ ちよつと待って！ これ
見て」

麻衣「えっ？」

チラシを麻衣に見せる藍香。

麻衣「科学部、実験教室？」

藍香「そこじゃないよ。一番下！ 見て！」

そこには「責任者・部長２年山本」の文字。

麻衣「これって！山本くん！？」

○同・化学室・前・廊下

「科学部実験教室」の看板。

やってくる麻衣と藍香と壮一。

藍香「ここからは、麻衣一人で行きな」

麻衣「藍香」

藍香「私たちは、適当に見て、帰るからさ」

壮一「奥寺……。行くな！」

麻衣「えっ？」

藍香「はあ？ 加藤、何言ってるの？」

壮一「だって……。俺、奥寺が好きだ。だから」

麻衣「……加藤君」

藍香「加藤、ワルノリもいい加減にしてよ」

壮一「俺、アイツより本気だ。俺じゃダメか？」

麻衣「私……。ごめん！」

壮一「……」

藍香「加藤、お前の負け。私たちは退散するよ！」

麻衣、ファイト！」

壮一を引っ張って、藍香は去る。

一人残った麻衣。

麻衣「（緊張して）……」

○同・化学室・内

教室のドアを開ける麻衣、中を覗く。

子供たちが教室の前の長机に集まっている。

その中心に、白衣を着た悟郎がいる。

悟郎「ここに1円玉があります。1円は1枚で1グラムだってみんな知ってるかな？」

子供①「えーそうなの？」

悟郎「今日はみなでこの1円玉と天秤を使って、いろんなものの重さを計ってみたいと思います」

思わず拍手する麻衣。

麻衣に気づく悟郎。

悟郎「奥寺さん……！」

子供たちや他の科学部員たちが一斉

に麻衣を見る。

麻衣「ど、どうも（ときこちなく会釈する）」
子供②「先生の彼女？」

麻衣・悟郎「違います！」

視線が合う麻衣と悟郎、照れくさい。

○同・屋上

中庭を眺めている麻衣。

野菜ジュースを両手に持ってやってくる悟郎。

悟郎「奥寺さん、お待たせしました。これ、売店で。いつもの、見つけたから」

と野菜ジュースを一つ麻衣に渡す。

麻衣「ありがとう。山本君。実験教室は抜けてよかったの？」

悟郎「他の部員たちが代わってくれたから。ちよつとだけなら大丈夫」

麻衣「ごめんね」

悟郎「いや。そんなことないよ。それより、ビックリした。なんでここに？」

麻衣「それは……友達！　ちょうど誘われた
んの。文化祭行かないかって。だから」

悟郎「そっか。本当は、朝、会ったら誘って
みようかと思ってたんだけど、準備で早く
登校しないといけなくて……」

麻衣「そうだったんだね」

悟郎「ごめん」

麻衣「ううん。なんかホッとした」

悟郎「そう？」

麻衣、悟郎を見て、微笑む。

悟郎「えっ？　なにになに？」

麻衣「白衣。すごく似合うなーと思って。博
士みたい」

悟郎「そうかな？　奥寺さんの雪女ほどじゃ
ないと思うけど」

麻衣「なにそれー」

微笑む麻衣と悟郎。

悟郎「それじゃあ、僕、そろそろ戻ります。
せつかく来てもらったのに、案内できなく
てすみません」

麻衣「私も友達待ってるし」

悟郎「それじゃあ、行きましようか」

行こうとする悟郎。

その白衣の裾を掴む麻衣。

悟郎「奥寺さん？」

麻衣「山本くん……！ 私、ウソつきました。

本当は会いたくて来たんです。山本くんに
会いたくて来たんです！」

白衣の裾を掴んだ麻衣の手に力が入
る。

麻衣「1円玉を拾ってもらったあの日から私、
ずっと……ずっと、山本くんのこと（我に
返って）あっ！ ごめん！」

と白衣の袖をはなす麻衣。

悟郎「いや……」

麻衣「……（恥ずかしい）」

悟郎「僕も。奥寺さんのおっちょこちよいで
そそっかしいところ、好きです」

麻衣「！」

麻衣、微笑んで

麻衣「（照れながら）私って、そんなにおっち
よこちよいかな……？」

見つめあう麻衣と悟郎の二人の間に笑
顔がこぼれる。

（おわり）